第八章 ルシタニア号事件

全般的な状況一切が自分にとって不利に傾いているとき、個人の意思はどうあれ、それに流されていかざるを得ないことがまま生じる。「ドレド戦役」であらゆる戦略上の奇跡を演出してのけたマールクでさえ、「戦略上の状況がどうにもならぬくらいに不利になつているときに、小手先の戦術で挽回できるということとはめつたにないよ。そういう状況で戦闘を行わなければならなくなつたら、どうやって逆転勝利をつかもうか、ではなくて、どうやって損害を少なくして、戦場を逃げ出すかが最大の課題だね」と語っている。

共和国暦の七一九年半ばのコーティにとつての、いわゆる「戦略的状况」は、まったく彼女にとつて『不利』という単語を絵に描いて額縁までつけたようなものだった。

「選択の余地はないのよね。こうなつちやうと……」

連邦空軍国防情報局から派遣されてきた尋問のエキスパート達を前に、コーティはさして表情を変えでもなく答えている。

「共和国政府は、きみが出頭すれば、きみの父親の生命をたすけてもいい、と言つてくるかも知れない。きみは、父親を捨てるのかね」

「パパは……」

コーティは、太い曲線を描いている眉をわずかも動かさない。デュランは、コーティに逃げる、と言った。声にしたわけではな

い。しかし、逃がしてくれたのだ。

「パパは、あたしに逃げるつて言った。だから、逃げる。悪い？」
「いや、悪くない」

「それに、偉い人たちはパパを一度騙したわ。何か知らないけど、総理大臣に届けさせといて、そんなこと知らない、だつて……そんな人たちが何か約束してくれたつて、信じる方がおかしいよ」

コーティに、同年輩の少女達と一線を画するものがあるとするば、このバランスのとれた状況判断力と冷静さだつただろう。彼女の名前を歴史に刻印せしめた事件は、彼女自身の気性そのものとは無関係に引き起こされたものに違いないが、しかし、コーティがコーティでなかつたとすれば、歴史の奔流の中で彼女の名前は、ただ一度だけ浮かび上がつてすぐに消え去る泡沫と、運命を異にするものではありえなかつただろう。

尋問係は特に感銘を受けた様子でもなくうなずき、尋問の終了を告げた。それが、数日に及んだ尋問そのものの終了を意味していることを、コーティは、与えられている居室に帰つた後で公式に知らされた。

「共和国公用語語彙研究のため」という名目で、一日に必ず一度は訪ねてくるリヴァーズは、多少、煩わしくないこともない。生命を救つてくれた相手だから文句は言えないし、軟禁状態にある今では、外の情報を持つてきてくれるだけでもありがたいのも事実だ。

「なぜ、紅茶だけ？」

ならべられたブランデー・ケーキを、コーティは興味のなさそうな視線で一瞥する。

「甘いもの、好きじゃない。どつちかつて言つと、紅茶よりもミ

ルクの方がいいな。もう一〇センチ上背が欲しいもの。アリシア・ミュッケル議員のこと知ってる？ かつこいいよ、あたしよりずっと背が高く、金髪の美人で、それにすぐく頭がいいんだ」
「さてね」

ブランドーの小瓶から、琥珀色の液体を紅茶のカップに注ぎ込みながら、リヴァースは首をひねる。彼が作成した、共和国政界の人名録には、“アリシア・ミュッケル”の名前はなかった。

「残念だけれども、その名前は知らない」

「ふーん？ あたしは憶れるな。あたしって背が伸びないんだよね。一七にもなつてこれじゃ、もう駄目かなあ」

「そうだ、それよりも重要な話がある。きみを保護していることを、まもなく公表する。きみが亡命を求めていることと、連邦がそれを認めたことも、だ」

「そうなの？」

「どことなく他人ごとのような口調だった。ミルクをたつぷりいれた紅茶を口に運び、ため息をつく。

「他人事ひとことみたいなの調子だね」

「近いよね。こつちの都合を申し立てても通りそうにないもの。今更、興奮したつてしょうがないって思わない？」

「共和国の宇宙軍が、きみの身柄を奪還にくる可能性がある。連邦政府は制式艦隊を動員して、シユネーゼルまで迎えに来させるそうだ」

「大げさだなあ……」

「コーティは紅茶を啜る。連邦産の最高級紅茶の香りは、コーティにもすぐにそれと分かるものだった。
「美味しいね」

「あ？」

「紅茶」

「そうかね？」

「賢沢」

「え？」

意味がつかめず啞然としているテリーは取りあえず無視する。共和国宇宙軍といえば、あのマールク提督が指揮をとっているはずだった。“ドレド戦役の英雄”であるマールク提督が、自分を奪い返しにくるかどうかが、彼女の知識では判断を下しかねた。

黙って紅茶をお代わりし、ミルクを注いでいるコーティに、リヴァースは、多少不満そうだった。ちよつと虚無的なところが見えかくれするにしても、弾力に富んだ心の動きを見せるコーティに、彼は十分以上の関心を抱いている。彼女が連邦での生活に不安を抱くのならば……ふつうなら抱くだろう……、保護者としての立場を申し入れてもいいと思っているのだが。

「行きがかりということもありますから」

「キャスパー大使に向かつて、リヴァースはそう答えたものである。」

連邦と共和国の外交問題の争点になり、しかも、近いうちには故郷を離れて連邦母星へ移らなければならぬ。多少は不安なり、恐怖なり、一七歳の少女らしい感情の揺れを見せてもいいだろうにと思ふのだが。彼の期待に反して、冷笑とも微笑ともつかない奇妙な表情を浮かべながら、コーティはいつかな動揺を示そうとしないのだ。少なくとも、表情に出すということはない。

「どこへいくことになるか、知りたくないのか？」

「連邦でしょ。だったらどこだって大して変わりがあるように思

えないなあ。どうせ言葉は通じないんだし」

不安も動揺もないと言えば、完全なうそだった。ただ、それを表情に出してリヴァーズに助けを求めようとは思わない。コーティには、喧嘩と犯罪に満ちたイエルスブルグのダウンタウンで、父と二人暮らしをしていた当時から信条がある。

「汝、無闇に他人を頼るなかれ」……

読心術者でないリヴァーズには、一見、警戒心の塊のようなコーティの表情の裏までは読み切れない。

「やれやれ……」

肩をすくめ、リヴァーズは告げた。

「発表は五日後の予定だよ。多分、しばらくは連邦首都で、連邦空軍の監視下に置かれることになると思う」

「フェレラ首相暗殺は、連邦との共存を望まぬ共和国反動派の策謀であり、コーティリア・バードフェザーは、その策謀に巻き込まれた犠牲の子羊ではない」

シエルメス上院外交委員会は熱気の中にあつた。発言席で熱弁を揮う、シュレジェン恒星区選出の上院議員ヨシフ・パインヒルの情熱が、そのまま物理的な熱気と化して室内の気温を上げていた。

「市民を裏切り、自ら罪を犯した国家の犠牲者を、政治亡命者として迎え入れるのが、連邦の外交の基調たるべき信義というものではないのか。そもそも、一七歳の少女に、国家元首を暗殺してのけるほどの行動力と組織力が備わっているわけがないではないか」

大戦勃発六ヶ月前の連邦暦五六九年三月二五日。

シエルメス連邦にとつてただ二つの“外国”の内の一つ、そして連邦と互角の国力と軍事力を持つと見られている唯一の勢力であるル・ラント共和国の暦では、七一九年九月四日にあたる。

事件はその約一ヶ月前。場所はル・ラント共和国首都レイヴェルゲン。正確には共和国暦七一九年八月八日、共和国首相官邸でそれは起こった。

当時の共和国首相ヴィセンテ・フェレラは早朝の散歩の途上、二人の支持者との会見に応じた。陳情書と、署名を納めたと称して渡された厚い封筒は、フェレラが官邸に持ち帰り、秘書に開封させた直後に爆発した。強力な爆弾は首相官邸を半壊させ、フェレラの肉体を四散させるに十分だった。

犯人は“デュラン・バードフェザー退役大尉とその娘コーティリア”を名乗り、事実、デュランはその日の内に逮捕された。しかし、一七歳のコーティリア・バードフェザーはホバー・バイクを鮮やかに操って追跡を振り切り、姿を消したのだ。いわゆる“バードフェザー事件”がこれである。

一か月余り、共和国警察、および憲兵隊の、威信をかけての捜索から逃れ続けていたコーティリア・バードフェザーの所在が明らかになったのは、共和国暦七一九年の九月に入ってからのことである。

こともあろうに、彼女を発見して連れ帰ったのは、連邦大使館の通訳官テリー・リヴァーズ。ことの重大さに驚いた大使フェルトリック・キャスパーは、極秘裏に事実を通報してきたのである。

「コーティリア・バードフェザーの、連邦大使館による保護は、共和国に対する重大な内政干渉となる恐れあり。共和国外務省に

連絡をとり、身柄の引き渡しを申し出るべきである」

キヤスパーの意見は至当なものではあった。

奇怪な反応を示したのは、大統領から検討を求められた上院外交委員会だった。パインヒルを中心に、外交委員会はコーティリア・バードフェザーの連邦への亡命を認める方向での議論を展開し始めたのである。

「議長……」

パインヒルに冷やかな視線を据え続けていたレイフレム・ナイザル・ネレイドが発言を求める声は、低いが室内の空気を緊張させるに十分だった。

「そのような感情論は、国家の外交としてとるべきではない」

言葉は穏やかだったが、口調は辛辣さに満ちていた。

「古諺にも言う、理論を伴わない議論はヒステリーと同じく、多少の空気の振動以外に何らの生産的な意味を持たない、もし、この議場に一発の爆弾が投げ込まれて我々全員が死傷し、その容疑者が一七歳の少女であったとしよう。ル・ヨント共和国大使館が彼女を保護し、あまつさえ共和国母星への亡命を認めたとする。これに対する連邦の選択は何か？」

「そのような仮定の話をしているのではない。我々は現実の話をしているのだ。無論、ミスター・ネレイド、立場が逆であれば連邦にとつての最もありうべき選択は、戦争を前提とした強硬外交だ。この点では私も意見を異にするわけではない」

「では、選択に迷う必要はないではないか」

ナイザル・ネレイドは言う。容疑者コーティリア・バードフェザーを引き渡すのが連邦にとつてのベスト・チョイスである、と。

「無条件に、ではない。公にする必要はないが、何らかの付帯条

件をつければよい。ル・ヨント共和国圏への航路の自由航行権、連邦船籍の民間船護衛が、あるいはデュレイン辺境圏の対宇宙賊警備をル・ヨント宇宙軍に肩代わりさせるか……子供一人の身柄の代償とすれば大きすぎるかも知れないが、首相暗殺容疑者の身柄と共和国政府の面子の代償とすれば安いだろう。何しろ、元首を暗殺した容疑者を一ヶ月も捕らえることができなかつた無様さを取り繕える。ル・ヨント政府にしても不利な取引ではないと考えるが」

ナイザルの主張に、パインヒルにかわつて別の委員が反論する。「連邦空軍の調査によれば、国力において連邦は共和国を圧倒している。ミスター・ネレイドに向かつて軍事を説くのは僭越かも知れんが、戦力自乗則に鑑みれば、連邦の軍事の実力は共和国の少なくとも二〇倍以上に達していると考えていい。この差を考えるなら、共和国に連邦との戦端を開くだけの意思は生じないと考えて間違いあるまい」

「希望的観測でものを言うべきではない」

ナイザルの反論が辛辣さを増した。

「だろう、違くない、はずだ……そのような言葉で一国の外交なり、政治なりを論じるべきではない。共和国の国力が連邦の数分の一だとしても、共和国宇宙軍そのものの戦力、戦闘能力がそのレベルであるという証拠は何もない。共和国の軍事力について具体的に分かつている数字は、先年の“シュネーゼル紛争”で彼らが派遣してきた戦闘艦艇の性能と数だけだ。艦艇の性能において、共和国宇宙軍は連邦空軍と互角か、それ以上との結論も得られている。紛争での勝利は、戦場に三倍の兵力を集中できた我が軍の指揮能力に帰する。これが空軍からの報告の内容だった」

ナイザルの視線が室内を薙ぎ払う。ある者は鞭で拍たれたように身をのけぞらせる。あるものは視線そのものが物理的な圧力をはらんでいるかのような錯覚に耐えきれず、視線を床に注ぎ込む。

「そもそも、バードフェザーなる少女が、フェレラ首相暗殺の真犯人であるか否かを判断するのは共和国司法当局の仕事である。なるほど、政治的な問題から、連邦への亡命を求めるといふのなら、連邦としても多少の対応は必要であろう。しかし、犯罪者までを亡命させるというのでは、国家間の外交など成立しない」

視線を向けられたパインヒルの顔面からも、一気に血の気が退いた。

「では我が国を頼って、救いを求めてきた無力な少女一人、みすみす共和国の謀殺するに任せてしまえと言うのか。わたしたちは、このように非人道的な考えの持ち主が上院外交委員会の一員を占めているという事実、堪えがたい羞恥を覚えずにいられない」

「そうだ、そうだ、あまりにも“非人道的だ”……やじめいた声が上がった。力を得た他の委員も“人道主義”を錦の御旗のように掲げて口々に反論を始める。白熱した議論は、しかし、“理論を伴わない、空気の振動”でしかなかったようだった。

公式記録は伝えている。

ザン・ダイナスト
“覇王”とまで呼ばれるナイザル・ネレイドですら、委員の大多数に“人道主義”の旗印を掲げて集中砲火を浴びせられれば、沈黙するしかなかったのだ」

議事録には、ナイザル・ネレイドの捨てぜりふめいた反論が記載されている。

「連邦の外交が、かくのごとき一時の感情に流され、ついには選択を誤るにあたって、その場にありながら何も手を施すのことの

できない自分の無力さに、心よりの落胆を覚えるものである」

連邦暦五六九年四月三日。

連邦外交委員会は、賛成一三反対二で、コーテイリア・バードフェザーの連邦母星への亡命許可を求める決議を可決する。「場合によっては世論に、その可否を問う」との姿勢を強硬に示す上院外交委員会に、“内政干渉は戦争を招きかねない”と渋る外務省と連邦空軍は押し切られた格好になったのである。

「非人道派とはまた、言ってくれるものだ。外交を感情論で処理した国家は滅びる。歴史上の教訓を忘れ去っていると見えるな」

「焚きつけた当の本人がよく言う。選択を誤らせたのは、いったいどの誰だ？」

ナイザル・ネレイドの日常は多忙である。

朝七時(現地球時間換算で午前六時)には朝食を済ませてオフィスに入り、コナイテド・ディストリクト一時に連邦特別区の議会へ向かう。外交委員会、財政委員会、立法特別委員会など所属する委員会、および本会議等が終わると再びオフィスに戻り、深夜まで執務。特別区郊外の邸宅に帰宅するのは二七時(現地球時間換算で午後一時過ぎ)以降になるのが普通だった。その他、支持者や同僚との会食、地方への遊説など、自宅で夕食のテーブルに向かうのは一ヶ月に一回か二回である。

その希な機会の相手をしているのが、サイモン・ユーゼルフ・ノウラン。連邦最大の企業複合体シユレフ・コングロマリットを支配する、ビッグ・ブラザーズ“最高経営幹部会議”メンバー。ステイシー・フランセスナイザルの現夫人の兄。

ナイザルは肉食獣めいた、獰猛な微笑を浮かべる。

「選択を誤ったのは連邦政府だ。わたしではない。私は、連邦政府が選択を誤るに当たって、何もできなかったほど無力だ」

「見事だな、ナイザル。連邦がバードフェザーとかいう娘の亡命を認めれば、面目を潰されたル・ヤント政府は怒り狂う。その後に対応次第では、全面的な開戦も有り得るわけだ」

「不幸なできごとだ」

ナイフを動かす手を止め、ナイザル・ネレイドはワイン・グラスを口に運ぶ。

「開戦となれば、建艦補充計画は全面的な承認を受ける。しかも、史上最初の恒星系間戦争だ。連邦空軍からの圧力を解かれたカルシュ・コーラルの反連邦活動は活性化するだろう。どちらを向いても、軍備は数倍増の拡充を必要とする」

「結構なことだ。シュレフに良いことは連邦によく、連邦に良いことはシュレフに良い、というわけだな。しかし、開戦して勝てるのか？ 長期戦に陥った挙げ句に勝てれば問題はない。負けてしまったらどうするのだ？」

「苦勞性だな、サイモン。負けたとしても、負けるのは連邦だ。シュレフではあるまい」

「連邦の政治的支配あつてのシュレフとの一面も確かにあるのだ。局地的な敗北は問題ないし、望ましい。連邦空軍の全面的敗北と連邦の崩壊、などというシナリオだけは頂けないが」

視線に温度というものがあるとすれば、ナイザルの視線のそれは絶対零度に等しい。経済活動のリーダーとしての傑出した才能もさることながら、競争者を蹴落とし、陥れる謀略の能力と鋼鉄の神経を誇るサイモン・ノウランであればこそ、並の人間ならで

気死しかねない視線の前に一瞬鼻白むに留まる。

「わたしの息子がいる」

「レーフラム・トゥリユー・ネレイド少佐、か。なかなか優秀な軍人のようだが、彼の存在が、連邦の勝利を保証するとも言うのか、ナイザル」

「軍事的天才というものは、探し出すものだ。教育するものではないのだ。レーフラムは天才か、それに近い存在だ。ル・ヤントにレーフラムに匹敵するような天才が存在するなどという偶然のないかぎり、連邦の最終的勝利は約束されている」

歴史の好む偶然に關して、さしもの“ビッグ・ナイザル”の視線も及ばない。相争う隣国に、同時に軍事的な天才を配置するという偶然に……

もつとも、クローネス・マルクの存在を知っていたとしても、ナイザルが些かでも動揺したであろうと考えられる歴史的な証拠は存在しない。

……人道主義、結構なことだ。選挙民にアピールし、自身の感情を満足させ、そして……

ナイザルは嗤う。

……自らの懐を暖めることもできる。レットルとは便利なものだ。一度貼りつけてしまえば、誰も言葉の中身までを改めようとはせぬのだからな。

『ナイザル・ネレイドは、自らに“非人道主義者”のレットルを貼り付けた上で、国家にとつての最良の選択を提示してみせたのです。その結果、彼と同じ選択を主張する人々が、主張の内容が同じであるが故に“非人道主義者”の烙印を押され、主張に耳を貸してもらえなくなりました。一度“非人道的”とのラベルを貼

られた人間の主張など、誰も冷静に分析しなくなるということを知り尽くしていた。それが、ナイザル・ネレイドの悪魔的なまでの狡猾さ、あるいは巨大さだったのかも知れませんが」

“銀河系大戦”の貴重な記録を残すことになるある女性は、その手記に、そう書き遺している。

グラスを満たした澄明なワインの漣が照明を弾くさまが、ナイザルに色彩を伴わない白い虹を連想させる。

時が移り、時代が変わる時、白アカス・アルヒスい虹が陽を貫くという。

……時代を変えるのは虹ではない。

時の流れを変えるのは超常的な力でもなければ、ただの一人の、あるいは一握りの英雄達の手でもなかった。白い虹にひたすら不吉を見いだした古代の権力者は、彼らの足下を掘り崩す無名の、しかし、無数の存在に気づいていなかったのだろう。

……この程度の底の浅い謀略で歴史が動くのか。動くはずはないが……

もう一度、ナイザルは嗤う。

……もし、動くなら……そういう歴史自体、大したものではないということだ。

共和国暦七一九年九月一〇日、連邦暦五六九年四月六日、駐ル・ラント連邦大使フェルトリック・キャスパーは、共和国外相ジェリコウ・シユジュケイを訪れ、一通の文書を手渡した。

「書式が合っていますか、外相閣下？」

ドレドからの最後通牒を“書式に合わない”と却下したシユジュケイの“伝説”はずでにキャスパーも知るところになってい

る。自然、口調も辛辣な皮肉の刺をはらんでいた。

「うむ……これは、一体、なんの書簡ですか？ コーティリア・バードフェザーなる共和国市民を、政治的亡命者として受け入れ、連邦母星へ護送する……とは？ 共和国の市民が、共和国を捨ててよそへ行くなど考えられませんなあ。こつという形式の挨拶状は、あまり前例がないですな。受け入れられるかどうかは、あとで確認させましょうな。本来なら受け付けるわけにはいかんが、連邦

への儀礼の問題もあることですしな」

「そのようにお願いしましょう」

ジェリコウの鈍さを、すでにキャスパーは憎悪に近い思いで思い知らされている。表面上の敬意を装っただけの儀礼も、キャスパーにとつては苦痛以外の何物でもない。

「もつとも、閣下の部下に、この書簡の前例を考えなければ幸いと考えますが、それに、共和国を、居心地のよい社会と考えるのは、閣下と閣下の知人だけに限られるでしょう」

「わたしとわたしの知人が、共和国の偉大さを認めておるんですぞ。共和国は偉大な社会だと、認めんとは、連邦はひどい所なん

でしょうなあ」

「左様ですな。閣下にとつては……」

キャスパーは、もはやこの鈍重な老人への嫌悪を隠す、最小限の努力も支払おうとはしなくなつた。

「……最悪の場所でありましょう。これで失礼します」

シユジュケイの鈍重さはともかく、共和国政府そのものの反応は素早かつた。キャスパーのもとへ、共和国政府からの書簡が届

けられたのは翌日の一日。激烈な調子で連邦政府の“背信”を責め、コーティリア・バードフェザーの即時の引き渡しを要求す

るものだった。

「万が一、連邦政府にして、共和国政府の以来を拒否することあれば、両国間の友好関係は破綻の危機に直面するものと心得られない」

書簡はそう結んでいた。

「これは最後通牒にも等しいものだ」

キャスパーからの連絡を受けた連邦政府は、外交団の引き上げと大使館の閉鎖を、共和国政府に通告する。

「連邦政府は、前首相暗殺事件に関して、再度の調査を要求する。連邦との和平交渉に積極的であったフェレラ首相の遭難は、連邦

にとって最大の損失である。連邦側の調査によれば、コーテイリア・バードフェザーなるル・ラント人女性がフェレラ首相を暗殺

したとする、共和国側の主張には全く真実性を確認できない。つまり、フェレラ首相は謀殺されたことになる。これほどの重大事

件を、満足な捜査も調査も行わず、一少女の犯行と主張する共和国側の主張を、連邦政府は受け入れることができない」

挑発と言つてもよかつた。当然、ル・ラントの強硬派は“内政干渉だ”といきり立つ。突き上げを受けた共和国政府は、更に強

硬な抗議を行い、連邦政府は嘲ら笑うような調子で拒絶する。両

国の外務省と大使館を結ぶ通信回線が沸騰しそうなほどの熱を帯

び始めた共和国暦の九月一五日、コーテイリア・バードフェザー

は連邦首都への出発の日を迎えた。この日、抗議のために連邦大

使館を取り囲んだ共和国市民のデモ隊は、総数一〇万人を数えた

のである。

「今日って休みの日じゃないよ」

それがコーテイの反応だった。モニタ・カメラで、大使館を取

り囲んでいる数万の群衆を見せられても、さして感銘を受けた様子もなかった。

「何だつて？」

テリー・リヴァーズにとつても、彼女のこの反応は意外だった。

一瞬、ついていけず聞き返す。

「だからさ、今日は休みの日じゃないつて、そう言ったの」

「だから？」

「あ、鈍いんだ」

「説明してほしいんだがね」

「休みでもないのに、あんなにたくさん、人が出てきてるつてこ

と。うるさいんだよ、休暇を取るつて。学校だつて、平日に休み

を取るうつて思つたら、何週間も前に申請書を出してさ、サイン

を何十個ももらつて、行動計画書を提出して、職員会議で許可さ

れなきゃなんないんだよ」

「……しかし、それは学生の、それもきみくらいの年ごろの、場

合だろう？」

「にぶ！」

コーテイは説明を断ち切つてしまった。リヴァーズは理解する。

学生を例にとつて、共和国の一般的な状況を、彼女は説明しよう

としたのだ。人口数百万を数える共和国首都レイヴェルゲンであ

る。一〇万人は、それほど驚くべき数ではないかもしれない。し

かし、抗議のデモは大使館だけではない。共和国外務省、議事堂、

更には宇宙港と大使館を結ぶ道路にも、抗議を叫ぶ群衆が溢れて

いるらしい。少なくとも、共和国首都の交通システムは、これで

麻痺するのではないか？

ランドウルフ・ワイゲルマン大佐に率いられた第八艦隊の残存部隊四〇〇隻が、要塞からの警告を無視して突然に出動したのは共和国曆九月二二日のことだった。

要塞にはローナクの第二艦隊と、ヤンデキフィティの第七艦隊があったが、いずれも演習の為に攻撃中であり、しかも、ドライバオム要塞内の標準時間が深夜であったことが事態を悪化させた。当直士官は、就寝中の先任指揮官フェレスレット・ランク大佐を呼び出すのをためらい、ランクが第八艦隊の出航を知ったのは、結局六時間もあとのことになった。

「なぜ、たたき起こさなかった！」

それほど重大な事態だとは思わなかった、という当直士官のいわけをランクは無視する。ワイゲルマン部隊の航路のトレースを命じるとともに、ローナク、ヤンデキフィティの両司令官を呼び出させる。

「第八艦隊の残存部隊だと？」

明敏なローナクでさえ、忘れ果てていた記憶を呼び覚ますのに数秒を要した。

「そいつらが勝手に出ていった……とそういうことか？」

「そうです。今、航路をトレースさせていますが……つい二日前に、連邦の連絡船が通過して行ったばかりですから、気になります」

「連絡船というと、コーティリア・バードフェザーを乗せた？」

「そうです、ヤンデキフィティ提督」

自分より年下の、少年兵出身のヤンデキフィティに、ランクは上官に対する敬意を示した。士官学校から参謀本部作戦局というエリートコースを歩んだ経験のある生粋の士官である。本来、

マールクを最も蔑視し、敵視するべき立場にある。しかし、「ドライバオム回廊宙域会戦」に先立ち当時の参謀総長ターク大将の不興を買って左遷された彼を正當に評価し、ふさわしい地位を与えて遇したのはマールクの方だった。

「ワイゲルマンの部隊が連絡船を撃沈したりすれば、連邦は怒り狂う……」

「メル、お前の艦隊の方が近い」

ローナクのいわんとすることを、ヤンデキフィティは正確に理解する。

「急行すれば間に合うでしょう。高速戦艦だけをつれていきます。あとを頼みます、ローナク提督」

「了解した……ということだ、大佐」

「では、『ヴェレルガルト』とホットラインを開設します。軌道データをおくってください。補給部隊を手配します」

「宜しく頼みます、ランク大佐。マールク閣下への連絡も」

第二艦隊で肩を並べて戦ってきた経験が、ローナクとヤンデキフィティの間の意志の疎通を極端に滑らかなものとした。短い協議が交わされたあと、第七艦隊四三〇〇隻から八〇〇隻の高速戦艦、巡洋艦の群れが分離する。残された三五〇〇隻はローナク艦隊と合流後、ドライバオムへ帰還する。

「グッドラック、メル。参謀本部の薄汚ねえ連中に、机の上で考えたようなことが、いつも実際にできるもんじゃないってことを、思い知らせてやってくれ」

「実行するのが自分達じゃないから、際限なくバカなことを繰り返すってことですよ」

いい放ち、ヤンデキフィティは艦隊を発進させる。政府や参謀

本部のやり方には常に反発を覚えてきた彼だったが、今回はやや異なった感情の微粒子が混じり込んでいるのに気づいている。コーティ・バードフェザー……あの元気のいい女の子を陥れ、あまつさえ謀殺しようとする“目に見えぬ何かしら”に、彼は苛立たしいほどの怒りを覚えていたのである。

コーティは、昔からワープが大嫌いだった。馴ればそうでもないというが、超空間……宇宙艇の操作マニュアルには、高次元と書かれていた……に飛び込むときと、離脱するときを感じる、あの名状しがたい異様な感覚。コーティは馴れることができない。馴れられないと、ひどい船酔いに似た症状に襲われる。大使館の屋上から搭載艇で衛星軌道上へ運び上げられてから、彼女はミルク以外の食物を口にできなかった。

共和国暦一〇月一〇日午後八時三二分。コーティを乗せた連邦の連絡船『ルシタニア』と、護衛のフリゲート艦四隻、それに巡洋艦一〇隻は、ドライバオムとシユネーゼルを結ぶ“ル・ヨント回廊”宙域を抜け、デュレーン恒星区境界の一恒星系にさしかかっている。共和国に対する主権を尊重するため、連邦空軍はフリゲート・クラス以上の大型艦をル・ヨント圏に入れていない。連邦空軍第二艦隊に所属する巡洋艦一個戦隊は、シユネーゼルで『ルシタニア』の到着を待ち合わせていたのである。

この日の夕食にも、コーティはほとんど手を付けられなかった。「ダイエツトかい？」
からかうリヴァーズを、火を噴くような目付きで睨みつけたけれど、気分の悪さは隠しようがなかった。

「これでも年頃なんだからね。ダイエツトして悪い？」

「悪いことはないがね……ダイエツトしなくてはいけないような体形には見えないね」

「リヴァーズ、若いご婦人をからかうようなことは感心しないな」
会話の調子でそれと察したらしく、同席していた『ルシタニア』号船長のギラルモがたしなめる。共和国公用語はほとんど理解できないのだが。

「どうしてもワープに馴れることができないのなら、いつそ長期睡眠に入ってしまうという手もあるが……これはあまりお薦めではないな」

「緊急連絡です、船長」

オフィサーからの連絡が、ギラルモの言葉を中断させた。

「つむ？」

「船橋からの連絡です。跳躍航路追跡装置が多数の艦船のワープアウトを捉えた……との」

「数は？」

「数百単位……距離、約二二〇〇光秒。現航路を維持するとして、約六時間後に追いつかれます」

「数百隻の艦船とは……また、これは」

ギラルモは、青ざめた顔色でスープをかき回しているコーティに視線を走らせる。この少女を亡命させたことで、共和国政府は激昂している。もし、この少女が首相暗殺の真犯人だったとすれば、連邦は共和国政府の面目に、正面から泥を擦り付けたことになるのだ。共和国の宇宙軍が怒り狂って暴走したとしても不思議ではない。

「これは少し危いことになるかもしれないな。護衛部隊はどう

「言っている？」

「軍艦らしい……と。それも連邦空軍のものではなさそうだ、とのことです」

「分かった。わたしは船橋へ行く……客人たちには、キャビンへ引き取って頂けるかな……？」

リヴァースの手ほどきで、コーティも連邦公用語を多少は理解できるようになっている。ギラルモの言葉に含まれた不穏な響きが、彼女の胸に不吉な思いを走らせる。やっぱり、あの“提督閣下”が追い掛けてきたんだろうか？

事実、“提督閣下”ことメル・ヤンデキフィティは、“追い掛けて”きていた。もつとも、コーティが思ったように、彼女を、ではなく、彼女を追い掛けているワイゲルマン大佐の部隊を、であるが、ワイゲルマン部隊が予想外に高速であったため、“ル・ラント回廊”の中で彼らを捕捉する目論みが功奏しないことを、猛将ヤンデキフィティも認めざるを得なかった。彼は、止むを得ず連邦圏に侵入する許可をマールクに求めた。

「連邦空軍に任せるという手もありますが、そうすると事実上の軍事衝突が起ってしまう。連邦政府への釈明は後で行うものとして、我々の手で処理するべきだと思いますが」

それ以外の方法がないことを、マールクも認めている。が、“連邦政府への釈明”が可能かどうか、彼はヤンデキフィティほどには樂觀できなかったのだ。

「これは……やられたかもしれないよ」

直後、マールクは、ミュッケルに向かって最悪の予想を指し示して見せている。ワイゲルマン部隊の処理は、ヤンデキフィティに任せておいて問題はない。倍の兵力を動員している上に、ヤン

デキフィティはマールク艦隊屈指の猛将である。

しかし、問題はそれとなのだ。ヤンデキフィティが危惧したように、ワイゲルマンの部隊と連邦空軍が衝突すれば、どうにも釈明のしようのない正面衝突になってしまう。しかし、ヤンデキフィティが彼らを処理してのけたところで、共和国宇宙軍が連邦政府の許可もなく連邦圏に侵入し、しかも軍事行動を展開したという事実は厳然として残ってしまう。連邦が共和国の非を鳴らして、外交チャネルを封鎖してしまう可能性は十分に以上にあつただ。

「釈明できるチャネルが開いてればいいけど……これは、どうにも」

「共和国も連邦も、ともに戦争を始めたい……というのであれば、チャネルが開いているとは考えられませんか……」

ミュッケルも同意する。共和国に連邦と和解する意思があるのなら、フェレラ首相は暗殺されたりしなかつただろう。そして、連邦側が共和国との共存を維持するつもりなら、コーティを亡命させたりはしないだろう。たとえ、非人道的との非難をこうむるうとも、連邦は非情なまでのマキャベリズムに徹したに違いないのだ。口に人道主義を唱え、コーティを保護した行動には、より非情な……あるいは非道なといつてもいい……計算が働いているはずだった。

「つまり……共和国と戦争をしたほうが、連邦にとっての利益になる……と？」

ミュッケルの察しのよさが、事情はともあれ、マールクには快い。マールクは言う。たとえば、連邦が内政面で問題を抱え込んでいて、市民の不満を国外に向けたような事情にさらされてい

たとしたら……

「可能性の一つに過ぎないけどね。フェレラ首相の暗殺まで、連邦が仕組んだとは思われないけれど、連邦にしてみれば願ってもないチャンスだったのかも知れない」

言いながら、マールクは胸の奥底に凍えるような恐怖を感じている。連邦との開戦は、共和国の軍需産業にはこの上ない朗報だろう。しかし、開戦を指喚する当の政産軍複合体にしてからが、連邦と連邦空軍の実態を知っているとは言いがたい。毛皮が欲しいからといって、素手で虎に掴みかかればどんな目に遭うことになるか……今の共和国政府首脳は、その程度の想像力の持ち合わせすらいらかった。

連邦との全面開戦を命令された場合、マールクは拒否できる立場にない。彼は、共和国宇宙軍艦隊最高司令長官であるに過ぎず、共和国宇宙軍そのものを完全に支配下に置いていくわけではないのだ。

「……無論、辞職はできるけどね」

それもとれない選択だった。彼が辞職すれば、参謀本部はこれ幸いと艦隊の指揮に介入し、“ドレド戦役”を再現したような愚劣な戦略指導を行うだろう。

「閣下が最も上手くやれるのですから、閣下自身がなさるしかないでしょう」

端正な表情を曇らせながら、ミュッケルがマールクの思いを代弁してくれた。

実際のところ、ミュッケル自身も将来を思うと心冷えるのを避けられないでいるのだ。序戦は勝てるだろう。しかし、序盤一度や二度の会戦に敗れたからといって、連邦空軍が簡単に屈伏する

とは思われない。また、序戦の勝利を外交的な勝利に結びつけるだけの外交的手腕を共和国政府に期待できるはずもなかった。

「戦術的完勝を積み重ねることで連邦空軍の戦力を徹底的に破壊し、最終的に連邦政府を外交のテーブルに引っ張りだすしかありません。もし、戦術レベルでなんとかしろというのであれば」

「戦術的な完勝を、そう何度も繰り返せると思つかい？そこまで樂觀するのはきみらしくないな」

マールクはため息をつく。彼には彼なりの思案があり、すでに準備も始めさせていたのだが、最も信頼する友人であり幕僚であるミュッケルにも、まだ策を明かしてはいない。ことは謀略の範疇に属する。親友の性格が、基本的に謀略を嫌悪することを、マールクはよく心得ていた。

「マールク提督は、自らが優れた戦略家であり、かつ政治家としての資質に恵まれていることを心得ていた。にもかかわらず、彼は、みずかららの資質を全面的に生かし切ることをためらい続けた。彼がもし、非情なマキャベリストに徹していたとするならば、この後数年にわたって共和国と連邦とを巻き込んだ混乱は、さらにその期間を縮めていたはずである」

としてマールクを非難し、寡黙にマールクの補佐に徹したミュッケルを称賛する声は、後世に少なくない。マールクは、批判に対する反論を言葉にすることは希であったし、ミュッケルもほとんどと言っていいほど手記に類するものを残していない。僅かに、アシアの日記に、ミュッケル自身の発言として残されている一言がある。

「何故そうしたのか、何故そうだったのかと問われたとしても、わたしにはそういう時代だったのだ、としか答えられない」

一〇月一日午前二時、ヤンデキフィティは、先行するワイゲルマンの部隊を遂に射程距離に捉えた。

「警告を発信せよ。貴官等の行動は、宇宙軍の統制を乱している。ただちにドライバオムに帰還せよ。これは、マールク艦隊最高司令長官からの命令である。命令に対する背反は、重大な犯罪行為となることを銘記せよ。繰り返す……」

何と苦々しいことだ、とヤンデキフィティは思う。“ドレド戦役”が終わった後、もうこれで戦争はない。戦わずに済む、と思ったのは余りにも甘い予想だった。

警告を数回繰り返したとき、オペレータが返信を告げた。頷き、司令官用のコンソールへ回すよう命じる。

“こちら『シーバット』号。ランドルフ・ワイゲルマン大佐だ”
一見して、狂信者と知れる陰気な表情と声は、ヤンデキフィティの最も嫌いなタイプである。

「取り込み中を恐縮だ、ワイゲルマン大佐」
ヤンデキフィティの口調は、内心の嫌悪を反映して、棘だらけの皮肉を植え込んでいる。

「貴官も一応以上の教育を受けた高級士官であってみれば、警告は理解できたはずだ。多くは言わない。ただちに反転し、帰投せよ。従わないのならば、実力で従わせるだけのことだ」

“何か勘違いをしていないか、ヤンデキフィティ提督。我々は、共和国宇宙軍の名誉を守るために、敢えて起った正義軍だ。その我々を撃つというのか。貴官は正気か？”

「貴官と、ここで大義云々の議論をしている時間的余裕は、残念だがわたしにはない」

ヤンデキフィティはうんざりした。狂信者というのは、どうしてこうも判で押したような反応しか示さないのだろう。“ドレド戦役”を無意味に長引かせ、多くの市民を無用に戦場に倒れさせてきたのも、この連中の同類ではないか。彼らが、自ら戦場にたらず、“大義”だの“正義”だのと唱えていたころ、ヤンデキフィティと彼の同僚たちは、紙のような装甲に身を託して、戦場を往來しなければならなかった。同僚の多くが永久に帰らず、生き残ったものも多くが負傷し、生身の身体を失った。

怒りの内圧を孕んだヤンデキフィティの眼光が、スクリーン越しにワイゲルマンを突き刺す。ワイゲルマンは知らず、軽く身をのけぞらしていた。

「従わぬというのであれば、それは貴官の選択だ」

ヤンデキフィティは怒号しない。制御された口調が、爆発寸前の怒りを伝えて、極端なまでに平板だった。

「貴官の選択に容喙するつもりはない。時間を割いてくれたことに、心より感謝する」

「ま、待て、ヤンデキフィティ提督。我々を本気で攻撃するといふのか？」

「それ以外のことを言っているように聞こえたのなら、それはわたしの言葉遣いになっていないせいだろう。宇宙軍での教育システムに欠陥があるとしても、貴官の知ったことではあるまい」

「待て、早まるな、ヤンデキフィティ提督。連邦は、共和国の威信を踏みにじり、犯罪者を亡命させようとしているのだ。放置すれば、連邦は何度でも共和国に干渉してくるに違いないのだ。あの連邦の連絡船を捕獲し、犯罪者を奪還することは、共和国の威信を守り、連邦の暴虐を防ぐ唯一の手段なのだ」

守るような「威信」が、今の共和国……共和国政府にあるのか。言い返してやりたい衝動を、ヤンデキフィティは辛うじて抑える。彼は、マールク艦隊の高級幕僚であり、その発言は、首將たるマールクの意見と見做されかねない。

「たまには自分の言葉でしゃべることだ、ワイゲルマン。わたしの聞きたいのは、ドライバオムへ帰還するの否か、この一点だけだ。答える意思がないのなら、貴官と話すことはなにもない」
年齢と軍事官僚としての経験から言えば、ワイゲルマンはヤンデキフィティに数倍していただろう。ワイゲルマンを圧倒したのは、最も激烈な戦場を、やはり最も危険な格闘戦闘部隊指揮官として戦いぬいてきたヤンデキフィティの経歴だった。数分の沈黙の後、ワイゲルマンは敗北を認める言葉を、胸廓の奥から絞り出したのである。

「待て、待ってくれ。分かった。帰還する。撃たないでくれ」
“こちら共和国宇宙軍。連邦連絡船『ルシタニア』号へ。貴船を追尾中であつた、一部叛乱部隊は帰順を受諾、反転せり。ご迷惑をおかけしたことを、こころより深謝する。貴船の安全なる航海を祈る”

『ヴェレルガルド』からの通信が入ったとき、『ルシタニア』のブリッジでは、張りつめていた空気が一気に解れ、小さな歓声まで上がった。ワイゲルマン艦隊は、ほんの数光秒にまで迫っていた。護衛の巡洋艦隊も応戦準備を整えていたとはいえ、一〇隻単位の巡洋艦では、高速戦艦まで交えた四〇〇隻の部隊には、一瞬の半分も抵抗できなかったらう。

「まずはよかつたとしようか」
ギラルモ船長も額一面に浮かんだ脂汗を拭う。いざとなれば、

『ルシタニア』に装備された小口径熱線砲を動員して、かなわぬまでも抵抗を、と決意していたのだ。

「まったく、あのお嬢ちゃんもたいへんなトラブルメーカーだったと見えるな」

「自分でトラブったわけじゃないでしょうが……」
リヴァーズの口調もさきほどまでの緊張を反映してか、僅かに闊達さを欠いていた。

この時、巨大な歴史の転換点に立っている、との認識は当事者たちにはありえなかつた。歴史上、往々にしてあることなのだが、余りに巨大な流れの中に立ち合ってしまったがゆえに、その渦中に巻き込まれた当事者たちには、渦の巨大さが客観的な事実として見えてこないのだ。そして、渦の最初のきっかけを作った人間、あるいは歴史という急行列車の走る線路のポイントを、指先一つの操作で切り替えてしまった人間が、自らの行為の重大さに気づいていることも希である。

午前三時一五分。

ワイゲルマン艦隊を、その隊列のなかに包み込み終えたヤンデキフィティ艦隊は、突然の混乱に見舞われた。艦列のただ中に、超融合核爆発が立て続けに閃光のネットワークを綴り上げ、他の艦艇は爆発の余波をこうむって艦列を混乱させたのである。

慣性中和システムの限界を超える急激な機動で、至近距離からの砲撃を躲した『ヴェレルガルト』の主砲が報復の閃光で虚空を切り裂いた。猛将ヤンデキフィティを撃ちとりそこねたワイゲルマン艦隊の巡洋艦が、艦体中央部を熱線に串刺しにされ、不吉な白さに輝くエネルギーの渦のなかに叩き込まれた。

「小細工を……」

ヤンデキフィティはさして興奮するでもなくつぶやく。ワイゲルマンの従順すぎる態度から、予測されて然るべき事態だった。帰順を装い、一転して牙を剥き出すというわけか……“宇宙の大義”とやらいうご大層なものを奉じているわりには、やることがせこ過ぎる。嘲笑の思いが一瞬に通り返ると、ヤンデキフィティは指揮シート上に立ち上がった。彼をして“マールク艦隊中、最も剽悍な将”との名を抱かしめる所以が、麾下部隊への叱咤の形をとって、彼の喉から躍り出た。

「全軍突撃！」

ワイゲルマンは、指揮官としてのヤンデキフィティを侮っていたことに対して、痛烈な形で報いを受けさせられることになった。ワイゲルマン艦隊から挑戦されたヤンデキフィティの直率部隊は、その左翼部隊を巧みに後退させるとともに、右翼部隊を突出させてワイゲルマン艦隊の後尾を痛烈にたたきのめした。同時に、ワイゲルマン艦隊の右方向に展開していた三〇〇隻の部隊は、副司令官のケルラー准将の指揮下に凄まじい戦術を採った。紡垂形の艦列をとったケルラー部隊はワイゲルマン艦隊の艦列の中央に突入したのである。この時、ヤンデキフィティの右翼部隊との間に暗黙の連携が成立し、ワイゲルマン艦隊の半数は、ケルラーとヤンデキフィティに交互に叩かれ、艦隊としての組織は驚くほどの速度で破壊され、解体されていった。

ワイゲルマンが発砲を命じて僅かに三〇分後の三時四五分、ワイゲルマンの旗艦に七発の宙雷と三〇発以上に及ぶ中小のミサイルが命中する。超高温の熱線と爆風、そして殺人的な放射線が、目に見える形と見えない形で無数の死をばらまいた。ワイゲルマンは、既に脱出を試みていたが、シャトル格納庫に躍りこんだ

ミサイルの一弾が、彼の生への執念をあつさり断ち切った。

ヤンデキフィティにとっては戦闘とも呼べないような戦闘に過ぎなかった。戦闘開始から一時間とたたないうちにワイゲルマン艦隊は完全に解体されてしまい、残存艦艇は白旗をかがげて降伏の意思を明らかにした。たつた一つの見落としを除いては……

ヤンデキフィティの展開した包囲網といえども完璧ではありえない。数光秒にも広がる戦場で、敵味方合わせても一〇〇隻そこそこの艦艇しかいないのである。しかも、意図的なECMと、核爆発に伴う電磁バーストがこれに加わる。ヤンデキフィティが見逃したのは二〇隻ばかりに過ぎなかったが、二〇隻で十分だった。

「ル・ラント軍艦突っ込んでくる！」

『ルシタニア』のブリッジで悲鳴が上がり、一瞬後、轟音と衝撃がそれをかき消した。猛烈な迎撃砲火を掻い潜った強襲揚陸艦が強引に『ルシタニア』の船腹に衝突、接舷したのである。

「姑息な手を……！」

『ヴェレルガルド』艦上で、ヤンデキフィティの軍靴が烈しくフロアを叩く。ヤンデキフィティや連邦空軍の阻止にあつてコーティを奪還できない場合は、いかなる手段をもってしても彼女を殺害する。共和国の抗議を無視して彼女の亡命を認めない連邦政府の威信は地に落ちるだろう。ヤンデキフィティは、マールクのように国家の威信を無視するタイプではなかったが、この時ほど政府の威信なり面目なりというものが愚劣に見えた瞬間はなかった。

「全軍突撃、『ルシタニア』号を救え！」

「閣下！」

マーゲニー・ケルラー准将が、ヤンデキフィティの血気を抑え

る。既に艦隊は、辺境の恒星系エムスの領空深くに侵入してしまっていた。

“これ以上の戦闘行為は危険です。あとの処理は連邦空軍に任せべきですし、揚陸艦相手では、我々の艦艇では有効な手が打てません”

「しかし……」

ヤンデキフィティは、しかし、結局はケルラーの進言を受け入れる。連邦圏深部での戦闘行為の危険性を認識し、マールクに進言したのは彼自身であつたし、だからこそケルラーの進言の正当性を認める冷静さを、戦場にあつても保ち続けていたのだ。もつとも、決断に至るまでに、短くはあるが、あらゆる神を罵倒する言葉を吐き散らしてからのことだつたのだが。

「たつた一人の女の子を捕まえるために、何という浪費をするのだ。共和国宇宙軍とは、精神障害者の集団か？」

このとき『ルシタニア』号の護衛についていた巡洋艦の搭乗員の一人は、そう書き残している。マールクがきけば、“近いね”とでも答えたことだろう。

「何をしている。機動歩兵を動員して、『ルシタニア』を救え。連邦圏の深部で、共和国宇宙軍にすぎ勝手をされたとなつては、連邦空軍の鼎の軽重が問われるぞ」

連邦空軍に所属する揚陸艦五隻が『ルシタニア』に取りついたのは、共和国宇宙軍の部隊が侵入して一〇分後。『ルシタニア』は、もともと辺境恒星系への長距離物資輸送船であり、それほど内部容積が広いわけではなかった。後に判明したところでは、両軍合わせて約四個中隊もの機動歩兵が傾れ込んだのである。狭い船内通路はたちまちトマホークの刃が噛みあう金属音と、ライフルの

発射音に満たされた。

当事者たちから見れば深刻極まりない闘争であり事態であつたのだが、客観的にはやや滑稽な事情も存在する。『ルシタニア』に侵入した共和国宇宙軍の機動歩兵は、

「コーテイリア・バードフェザーを捉えよ。母星へ連行できぬ時は、その場で殺せ」

と命令されていたわけであるし、一方の連邦空軍兵たちは、「侵入者を撃退し、コーテイリア・バードフェザーを保護せよ」と厳命されていたはずである。しかし、限られた空間しかない

はずの『ルシタニア』船内で、コーティはなかなか発見されなかつた。後から考えれば信じられないことだが、彼らの誰一人としてコーティの顔を知らなかつたし、彼らに戦闘を命じた側も、その事実には思い当たつた存在は皆無だつたのだ。

一面の滑稽さの他面には、戦闘行為の常として悲惨な事実が大量生産されていく。発見されないコーティと間違われ、『ルシタニア』に二〇名乗り組んでいた女性船員の半数が射殺され、数名が重傷を負う結果になつたのである。これが、『ルシタニア』の虐殺と呼ばれ、連邦が共和国に対して戦端を開くひとつのきっかけとなつた。無論、彼女たち以上の男性船員が、やはり戦闘に巻き込まれて射殺、あるいは斬殺されたのであるが、歴史はその事実に対する沈黙を守り続ける。

ローナクは些か露悪的な表現で、この事実を評する。「男が戦場で殺されたからって、誰が同情するものかね？」

揚陸艦接舷の衝撃で、コーティはほとんど反射的に事態を悟っている。ごく僅かの身の回りの品をジャケットのポケットに詰め込み、彼女はキャビンを滑り出た。彼女にとっての幸運は、船室

区画が揚陸艦の接舷位置からもっとも遠い位置にあったことだろう。

「あたしなんか追い掛けて何が面白いんだろ……」

通路を駆けながら、自分の立場の理不尽さを思いやらずにはいられない。七歳のときには生まれ故郷のドレドから、追い出されたも同然に送り出された。母星ではことあるごとに侮蔑を込めて“ハーフ”と呼ばれた。そして今度は身に覚えのない首相暗殺犯人扱い。そうまでして苛めることもないだろうに、と彼女は思うのだ。

コーティは、自分を悲劇のヒロインに見立てて陶醉するような趣味の持ち合わせもない。共和国が彼女を邪魔者扱いするならば、それでもかまわない。生命をとられるのだけは困る。

救命艇の格納庫の位置は確認してあった。宇宙艇の操作マニュアルはほとんど覚えていたし、実際、筆記の一次試験にも合格している。連邦の宇宙艇は設計コンセプトからして異なるだろうがなんとかなるだろう。脱出すれば、連邦の船が救助してくれるかもしれないし、もよりの惑星エムスは有人惑星だと、リヴァーズがおしえてくれた。もっとも、

「有人は有人なんだがねえ……」

と言葉を濁してはいたのだが。何故、言葉を濁したまでは聞く必要を感じなかった。まさか連邦圏きつての犯罪惑星というわけでもないのだから……そうだったとしてもかまうものか！

救命艇に続くドアロックを、うる覚えの操作で開く。リヴァーズに連邦公用語を習っておいたのは間違いではなかった。ほんの二、三カ月では片言も難しいところだが、読めることは読める。

「……！」

ドアが開いた瞬間、唸りを上げてトマホークが襲いかかった。戦友たちとはぐれ、偶然に格納庫区画に迷い込んできた共和国宇宙軍の機動歩兵の一人。

抜群の反射神経が、間一髪でコーティの生命を救った。通路に転がり、歴戦の勇者のそれとはとうてい言えない、未熟な斬撃を躲したのだ。

「おまえがバードフェザーか？」

幼いといつていい声がコーティを驚かせる。銀灰色の装甲服をまとった武骨な姿に似ず、その機動歩兵は彼女とさして変わらない年齢らしかったのだ。

「なんであたしを追い掛けまわすのよ。たまにはほうっておいてくれてもいいじゃない！」

「おまえを捕まえるか、殺すかすれば、たいへんな功績になるんだ。徴兵期間だつて短縮される。家に帰れるんだ」

「徴兵だつて？」

“ドレド戦役”中に布告された“一般動員法”と“学徒動員法”は現在も有効だった。コーティ自身、あと二、三年で軍からの召集がかかっていたはずである。もし、これらの動員法が解除されていないかつたなら。

「知らないわよ。あんたのために殺されなきゃならない決まりなんかあるもんか！」

「そうとも、おまえの知ったことじゃないさ。これは俺の問題なんだ。逃げられると思うのは勝手だけどな、丸腰で機動歩兵にかなうわけがない」

「そりゃそうだろうけど、だからって、逃げなくていいってことにはならないよ」

「時間を稼いでいるつもりなら、いい加減にやめとくことだ。こっちだって時間がない……」

もったいぶった調子でトマホークを振り上げる機動歩兵の姿を、コーティは奇妙なほど醒めた目で見つめている。それを諦めと見てトマホークを振りおろそうとした、その装甲服の胸を一条の閃光が貫いた。信じられぬものをコーティの手のなかに見いだして、呪詛と鮮血を肺の奥底から溢れさせる。

「……き、きさま……」

「銃ぐらい、扱えるよ。結構、威力あるんだね。あたしが丸腰だっ
て思うのは自由だけど、あんたの信念に付き合っこともないよね」
崩れ折れる機動歩兵の姿を見つめるコーティの表情は醒め切っ
ている。ほんの数カ月前まで、自分が人を殺せるなどと思っただ
とはなかった。万一にもそんなことにおなったら、動転して錯乱
するのではないか、とも思っていたほどだ。しかし、人の想像力
というものは、現実には追い付けるものでないらしい。リヴァーズ
が「護身用に」と貸してくれた携帯用熱線銃を、無造作にジャケッ
トのポケットに落とし込む。簡単なものだった。安全装置を外し、
僅か数ミリ、指を屈伸させるだけで一人の生命を簡単に奪い
とってしまえるのだ。

戦闘の騒音がコーティの聴神経を刺激し、脱出を急ぐべきこと
を告げた。フロアに倒れ伏した兵士にはもう一顧だに与えず、コー
ティは救命艇のコックピットに身を滑り込ませる。想像したとお
り操縦装置は、共和国のそれとは似ても似つかぬものだったが、
『ルシタニア』が民間船だったことが彼女には幸いした。乗客全
てが宇宙艇操縦のエキスパートではありえない以上、操縦装置は
可能なかぎり簡略化されたものである。もともと宇宙艇に関する

知識は人並み以上のものを持ち合わせているコーティであり、操
作方法を直感的に理解するには数分を要さなかった。

メインコンピュータに電源を入れ、エンジンを起動する。振動
で気づかれるかもしれないが、ぐずぐずはしてられない。馴れ
ない連邦公用語を操って、目的地を入力。差当たり惑星エムスと
いうことにする。

“目的地、惑星エムス、間違いありませんか、確認願います”
「つもう、まどろこしいなあ」

確認。コンピュータは了解し、航宙図が現れる。エムスまで約
一五〇万キロメートル。おってきた共和国宇宙軍の軍艦はほとん
ど沈められ……変な用語だ、とコーティは思う。昔、軍艦が海
の上を走っていたときからの用語だ、と歴史の時間に習ったこと
がある……てしまったから、なんとか辿りつけるだろう。大気圏突
入の操作はちよつと不安だけれども……。

エアロックの気密確認。各種の計器確認……もつとも、計器の
種類や読み方は勘だったけれど……。艇のホールドロック解除。
循環器システム動作確認。一息入れて格納庫のエアロック解除、
開放。鈍い振動と共に、満面の星々がまたたきもせず厚い展望
窓越しにコーティを見つめ返してくる。さあ、いくわよ……コー
ティはつばやく。幼いときから宇宙に憧れてきた。自分の手で宇
宙艇を操作して、宇宙へ飛び出してみたかった。共和国母星は、
コーティには狭すぎた。逐われに逐われてのことだけれど、自分
の手で宇宙へ出ていくことに違いはない。

どん、と背中を突き飛ばされるような加速。救命艇は『ルシタ
ニア』の船腹を躍りだした。

「わあ……！」

途端に頭がかゝつと熱くなる。人工重力装置をもたない小型宇宙艇では、飛び出した途端に上下感覚が消滅することは知識として知っていた。しかし、知っているのと、それに耐えられるのとは話が違ふ。とっさに自動操作に切り替え、シートに倒れ込む。猛烈なめまいと吐き気が納まり、そして失調した上下感覚がなんとかノーマルな状態を回復するまで数秒はかかっただろう。慌てて身体を起こし、操縦装置に取りつく。あぶないところで救命艇はエムスの大気圏をかすめる軌道に入りかけていた。大気圏で跳ね返され、宇宙の深部に弾き飛ばされれば、燃料をさして搭載しているわけではない救命艇では二度とエムスには戻ってこられない。燃料が切れ、加速できない小型宇宙艇で緩慢に迫ってくる確実な死を待つなど、コーティには真つ平だった。

『ルシタニア』号が救命艇を射出……」

ヤンデキフィティは、無論、それがコーティの乗った艇であるとは知らない。しかし、目の前でワイゲルマン艦隊の残兵と連邦空軍の機動歩兵とがコーティを争っているのだけは、確実な情報として知れている。猛将だけに何もできずに手をこまねいているのには耐えられないのだ。

「援護してやれ。ワイゲルマン部隊の揚陸艦が手を出すようだったら、構うことはない叩き沈めてしまえ」

ヤンデキフィティの配慮は無用のように見えた。結局、兵力に優る連邦空軍は、『ルシタニア』に侵入したワイゲルマン部隊の機動歩兵の全員を撃退し、接舷した揚陸艦もすべて武装解除された……かに見えた。

連邦空軍が包囲を完成させる寸前。一隻の揚陸艦が強引に転針する。それと気づいた巡洋艦『エフリキア』の主砲が咆哮し、数

十本の熱線の箭で不幸な揚陸艦を何度も串刺しにした。一瞬の苦悶の後、誘爆の閃光が揚陸艦の艦体を包み込んだが、その副砲数門が、コーティの乗る救命艇に向かって破壊力の槍を投げ放ったのが半瞬の数分の一、先んじていたのである。照準は正確ではなかった。しかし、偶然と運をつかさどる神の投げたサイが、この時はコーティにとっては凶の目を出してしまつたようだった。

「きゃああっ！」

救命艇のククピットでコーティは悲鳴を上げる。直撃ではなかった。直撃していれば、一秒の数百分の一で、コーティの身体は救命艇ごと蒸発し去っている。全く偶然に救命艇の艇尾を掠めた一撃がエンジンノズルを切り裂いたのだ。

「警告、警告。エンジン出力制御困難。操舵システム、反応急激に低下中」

「なに言つてんのよ、わかんないよ！」

操縦桿と呼べるような立派なものはなく、万年筆程度のサイズのスティックである。そのスティックの反応が急激に悪くなる。艇体が烈しく振動し、横揺れし、突き上げるように縦方向にゆさぶられる。展望窓の中で、惑星エムスが右へ左へ猛烈な勢いで揺れ動いた。

「救命艇、救命艇……どうした、無事か」

無線が共和国公用語を吐き出すのを、コーティは一瞬信じられない思いで耳をそばだてる。誰だろう、この声、覚えがある……「損害を受けたのか？ そのままでは角度が深すぎる。大気圏突入で燃え尽きてしまうぞ。艇首を上げる。コンマ五でいい。艇首を上げてホールドし、エンジンを切れ。そうしないと危ない！」

「わかつてるわよ、今、手が離せないんだから。忠告だけありが

と、聞こえないかもしれないけど」

鮮やかな青と緑に包まれ、白い雲に縁どられた惑星が眼前に迫る。綺麗だな……と思った。コーティの一番古い記憶。ドレドを去っていく宇宙船の展望室で、父に手を取られて、遠ざかっている生まれ故郷を見つめていたときの。あの時のドレドはこんなに綺麗じゃなかった。赤茶けた砂漠と、筋状に灌漑され緑化された居住地域。そして初めて見た母星も、コーティの記憶のなかでは奇妙な灰色に薄汚れ、歪んで見えていた。

エムスがゆれながら急速に大きくなる。操縦パネルには一面、不調を示すLEDが点灯し、必死に操作するコーティの顔を真っ赤に染めている。コーティも、宇宙艇が姿勢の回復が不可能なほどの損害を受けていることを悟り、おそらくは一七年の人生のなかで初めて絶望の叫びを上げた。

「だめ、艇首が上がらない！ たすけてえっ！」